

## 遠くて近い信仰者（4）ヨセフ

創世記 50:15-21

さきほどは、ヨセフの生涯のほんの一部分だけを読んでいただきました。ヨセフのことは、創世記 37 章以降にくわしく書かれており、創世記のおよそ四分の一を占めています。ヨセフの生涯は、とても興味深く、しかも、いじめやセクハラなどといった現代的なテーマがあります。まさに遠い昔にしながら今の私たちと同じ問題を経験した近い信仰者です。先ず少しヨセフの生涯をかいつまんで話しておきますと

ヨセフは、ヤコブの十一番目の男の子でした。年をとってから生まれた子どもだけに、ヤコブはこのほかヨセフを可愛がりました。ヨセフの十人の兄たちは、父親がヨセフだけをひいきにするので、ヨセフをねたみました。この時、兄たちはそれぞれ結婚して自分の家庭を持ち、父親から独立して生活していました。ですから、普通ならまだ少年のヨセフを父親がかわいがっているのを見て、あたりまえのこととして受け流せるところですが兄たちはそれが出来なかったのです。人間の心というものは複雑なものです。それどころか兄たちは年若いヨセフを憎むようになったのです。

兄たちの憎しみが頂点に達したのは、ヨセフが、自分の見た夢を話した時でした。ヨセフは「畑で麦の束をたばねていると、私の束が立ち上がり、お兄さんたちの束がわたしの束のまわりに来ておじぎをしました。」と言うのです。それを聞いた兄たちは「おまえは私たちに治める王になろうとするのか。私たちに支配しようとするのか。」と言って怒りました。ところが、ヨセフは、よせばよいのに自分が憎まれていることに少しも気づかないで、もうひとつの夢をも兄たちに話しました。それは、太陽と月と十一の星がヨセフにひれ伏しているというものでした。それが、両親も兄弟もヨセフの前にひれ伏すようになるという意味であることは、誰にも分かりました。またまた兄たちに怒りがこみあげてきました。それで、兄たちは機会があればヨセフを殺してやろうと思うようになったのです。聖書にはねたみから憎しみへ、憎しみから殺人へと拡大していく、人間の心が良く描かれています。あのアベルを殺したカインがそうですね。こうしたことは、現代では、いじめや差別、パワハラという形をとって表われています。

さて、ヨセフは、家から遠く離れた場所で、兄たちに殺されそうになるのですが、ちょうどそこにエジプトに向かうキャラバン隊が通りかかり、エジプトに奴隷として売られてしまいました。兄たちは、ヨセフから剥ぎ取った着物に動物の血を塗りつけて、父親には、ヨセフは野獣に殺されたと、告げました。

エジプトに行ったヨセフはパロ（ファラオ）の侍従長に買われ、やがて、その家のすべてを管理するまでになりました。ところが、侍従長の妻がヨセフに目をつけ、ヨセフを誘惑してきました。聖書は「ヨセフは体格も良く、美男子であった」と言っていますので、彼女の目にとまったのでしょう。ヨセフは誘惑を避けようとするのですが、侍従長の妻はヨセフの上着をつかんでヨセフにしつこく迫り、ヨセフは上着を残したままその場を逃げ出しました。侍従長の妻は、夫が帰ってくると、その上着を持ち出して、ヨセフが彼女に手を出したと訴えました。ヨセフは、奴隷の身分でしたので、なんの弁明もできないまま、監獄に追いやられました。今度はヨセフはセクハラ被害者となったのです。

侍従長の家で幸運をつかんだと思われたヨセフでしたが、「奴隷」よりももっと悪い「囚人」にまで落とされてしまいました。しかし、ヨセフは監獄にいたことによって、夢を解き明かす力があることがパロに知られるようになり、パロの夢を解き明かすことになりました。パロの見た夢は、七年間の豊作の後、七年間の飢饉が来ることを告げるものでした。パロは、ヨセフの知恵に感心し、ヨセフに全権を委ね、やがて来る飢饉に備えさせました。ヨセフは囚人から一気にエジプトの支配人、総理大臣にまでなりました。ここまでヨセフがエジプトに売られてから十五年はたっていたでしょうか、彼が三十歳の時でした。

パロの見た夢のとおり、七年の豊作の後、飢饉がやってきました。まわりの国は飢饉で苦しみました。エジプトには、ヨセフの働きによって、食糧が蓄えられており、食糧を求めてエジプトに来る人たちが絶えませんでした。その中にヨセフの兄たちがいました。ヨセフにはそれが兄たちであることがわかり

ましたが、兄たちには、エジプトの支配者がヨセフであることは知るよしもありません。ヨセフがエジプトに売られてから三十年近い年月が経っていますし、ヨセフはエジプト人の身なりをし、エジプトの言葉と話していたからです。この時、弟のベニヤミンがいっしょではなかったため、ヨセフは、兄たちが弟ベニヤミンを大切にしているかどうか心配でした。それで、ヨセフはわざと兄たちにスパイ容疑をかけ、兄たちのひとりシメオンを捕まえて、弟のベニヤミンを連れてくるように命じました。しかし、ヨセフは兄たちには食糧を与え、その代金もそっと返してやっていました。それから半年か一年ほどしてでしょうか、兄たちがベニヤミンを連れて、再び、ヨセフのもとに来た時、ヨセフは、こらえきれなくなって、ついに自分を明かし、驚き、恐れている兄たちに優しく語りかけ、父ヤコブを連れてエジプトに来るように告げました。ヨセフが兄弟たちと抱き合っただけで涙する場面は感動的です。

ヤコブは130歳の時に、一族を連れてエジプトに移住し、17年生きながらえて、147歳で死にました。ヨセフは、ヤコブをその祖父母アブラハムとサラ、また父母イサクとリベカが葬られているカナンにある墓地に葬りました。ヤコブの葬儀が済んだ時、兄たちは「今までは、父が生きていたから、ヨセフは自分たちにも親切にしたが、父が亡くなった今、自分たちがヨセフを殺そうとしたことに仕返しをするに違いない。」と考え、みんながそろって、ヨセフのところに行き、四十年前の罪を赦してくださいと願い出て、ヨセフの前にひれ伏しました。この時、ヨセフは、兄たちを赦し、いままでと変わらず、彼らに親切を尽くしました。それが、今朝の聖書の箇所にかかれていたことです。

ヨセフの生涯は、まるで小説のようです。彼のストーリーを読む時、いつも、わくわくし、また感動を覚えます。そして、多くのことを教えられます。ヨセフは謂れのないことで憎まれ、誘惑に会い、無実の罪で苦しめられましたが、そうしたことで駄目になってしまうことなく、エジプトで最高の地位にまで登りつめました。しかも、高慢にも、横暴にもならず、自分に悪をはかった兄たちでさえ赦しています。ヨセフは自らが苦難から救い出されたばかりでなく、飢饉の時に多くの国々と自分の民族を救う者になりました。「ヨセフが、あれほどの苦しみに耐え、誘惑を斥け、人を赦すことができたのはなぜだったのでしょうか。」今朝は、その中から、三つの理由をとりあげたいと思います。

第一に、ヨセフは「夢」、「ビジョン」を持っていたということです。兄たちはヨセフを軽蔑して「見ろ。あの夢見る者がやって来る。」創世記 37:19 と言って軽蔑しましたが、ヨセフはその夢によって、苦難を乗り越えることができたのです。兄たちは「さあ、今こそ彼を殺し、どこかの穴に投げ込んで、悪い獣が食い殺したと言おう。そして、あれの夢がどうなるかを見ようではないか。」創世記 37:20 と言いました。ヨセフの夢はこの時、消えるかには見えましたが、神から出た夢、ビジョンはかならず成就するのです。兄たちに殺されそうになった時も、奴隷に売られた時も、また囚人になった時も、ヨセフは神から与えられた夢を忘れず、「自分はこのままでは終わらない。」ということ信じ、将来に希望をつなぎました。奴隷の苦しみ、囚人のつらさに耐え、いわれのない罪をかぶせられても自暴自棄になりませんでした。ヨセフは、夢とビジョンを持ち、それをどんな時にも捨てなかったため、その夢が実現するのを見ることができたのです。

旧約の信仰の偉人たちはみな神からのビジョンを与えられ、それによって歩きました。ノアは洪水とその後の世界を信仰によって見つめ、忍耐深く箱舟を作り続けました。アブラハムは空の星を見上げて、彼の子孫がその星のように多くなるとのビジョンを得ました。人間の力ではどうも実現しないと思えることも、全能の神には可能であると信じたのです。私たちは、神のビジョンをつかんでいるのでしょうか。夢とかビジョンは特別な人に与えられるもので自分はそんなものはないと諦めておられないでしょうか？自分の夢とか何を自分はやりたいのか、そんな風に考えると分からないかもしれませんが誰かのために自分に出来ることはないだろうか？自分を必要としている人はいないだろうか？そんなことを考え

でゆくと道が開かれてゆくのではないのでしょうか？私たちは、個人としても、教会としても、神からのビジョンをしっかりと保ち、それによって目に見える困難を乗り越えて前進していきたく思います。

第二は、ヨセフは常に神と共にいたことです。ヨセフにとって神は、時々思い起こすだけのお方ではありませんでした。また、神は、彼の苦しみの時に、そっと姿を隠してしまうような方でもありませんでした。ヨセフは、いつ、どんな時でも、神が彼と共にいてくださることを知り、信じていました。ヨセフは、侍従長の妻の誘惑にあった時、「どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができましょうか。」と言っています。エジプトにいても、ヨセフは、アブラハム、イサク、ヤコブの神を忘れませんでした。それで神もまたヨセフを忘れず、ヨセフと共にいてくださったのです。侍従長は、「主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た」創世記 39:3 と、聖書にあります。また、ヨセフが監獄に入れられたときも「主はヨセフとともにおられ」創世記 39:21 ました。それで、侍従長も、監獄の長も、ヨセフの手にすべてを任せました。ヨセフがパロの夢を解き明かした時、パロは「神がこれらすべてのことをあなたに知らされたのであれば、あなたのように、さとくて知恵のある者はほかにいない。あなたは私の家を治めてくれ。」創世記 41:39-40 と言って、神がヨセフと共におられることを認め、ヨセフにエジプトのすべてを任せました。まことの神を知らないエジプト人も、ヨセフと共におられる神を認めざるを得ないほどに、ヨセフは神の側近くに、神と共に生きました。

私たちも、日曜日の礼拝の時だけ、「おひさしぶりでした」と言って神を覚えるような生活ではなく、朝ごとに「神さま」と呼びかけて、神と共に一日を始め、神と共に一日を終わる生活をしていきましょう。その時、私たちが「神は私と共にいてくださる」という確信を得るだけでなく、まわりの人々も「神はあなたと共におられる」ということを認めるようになるのです。

ヨセフの生涯の秘訣の第三は、ヨセフが神の摂理を知っていたことです。ヨセフは、兄たちに「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。」創世記 45:4 と言って自分を明かしましたが、その時こう言いました。「今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。」創世記 45:5 ヨセフは、神がこの世界と私たちの人生のすべてを支配しておられることを知り、信じていました。神が、この世界と私たちの人生に介入され、導かれることを「摂理」と言いますが、ヨセフは神の摂理を知り、摂理の神に信頼していました。ヨセフが兄たちを赦すことができたのは、神の摂理を、また摂理の神を信じる信仰があったからです。神の主権にすべてを委ね、神のなさったことを受け入れています。「あなたがたは、私に悪を計りましたが神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。」「あなたがたは、私に悪を計りましたが、です。そして、神が一切を良いことに変えられたのなら、どうしてヨセフは兄たちに仕返しをすることができるのでしょうか。ヨセフは自分の人生に神のご計画を認めました。それで、ヨセフは、普通だったら、仕返しをしてやりたくなるようなことをも、完全に赦すことができたのです。

多くのクリスチャンは「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」(ローマ 8:28) というみことばをよく知っています。いざ自分が同じ辛い目にあった時には、このみことばをどこかに置き忘れてしまい、自分にあてはめることができなくなることが何と多いことでしょうか。摂理の神への信仰を持つ時、今まで、どうていできないと思っていたことができるようになり、どうてい赦せないと思っていたものをも赦すことができるようになるのです。

ヨセフの信仰の秘訣を、私たちも自分のものとし、誘惑に勝ち、試練に耐え、そして、赦し、赦される生涯を送りたいと思います。